

キリストはどのようなお方か (バプテスマのヨハネとの対比)

ヨハネ福音書3:31-36 【新改訳2017】

- 3:31 上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地のことを話す。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。
- 3:32 この方は見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。
- 3:33 その証しを受け入れた者は、神が真実であると認める印を押したのである。
- 3:34 神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである。
- 3:35 父は御子を愛しておられ、その手にすべてをお与えになった。
- 3:36 御子を信じる者は永遠のいのちを持っているが、御子に聞き従わない者はいのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。

【祈りながら考えよう】

- (1) 「上から来られる方」と「地から出る者」を比較して下さい。
- (2) 「イエスに与えられる御霊」と「主の働き人たちに与えられる御霊」を比較して下さい。
- (3) ヨハネが、最も重要なこととして、最後に述べたことは何ですか。

【解 説】

(1) 「上から来られる方」と「地から出る者」

《上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地のことを話す。天から来られる方は、すべてのものの上におられる》(31節)

①イエスはどのようなお方か

イエスは「上から来られる方」であり、「すべてのものの上におられる」。地上のいかなる指導者よりもすぐれている。この世の指導者は、いかにすぐれていたとしても、しょせん地上のことしか語れない。彼らには神の御旨や目的を明らかにすることはできない。神の心とところから来られたお方だけが、完全な方法で神を知らせることができる。

イエスはただの人間ではなく、天から来られた方であるということである。地上の人間が地上のことを語るように、天から来られた方は、天のことを証しして下さる。つまり、イエス・キリストは神を啓示するお方なのである。

②バプテスマのヨハネはどのような方か

イエスと比較するなら、バプテスマのヨハネもその他のいかなる働き人も、はるかに劣っているということ、強い言葉で述べている。

「私は、人間にすぎず、地のちりによって造られた父親から生まれた者であり、地に属する者である。我々は生まれつき地に属しているの、我々のわざも地に属するものであり、我々の語ることも、説教も地に属するものである。」つまり、生まれつきアダムの子孫である者は、その働きに人間くささがつきまとう。

律法学者やパリサイ人の教えと比較するなら、バプテスマのヨハネの教えは地に属するものではなく、天に属するものである。

しかし天から来られた方の教えと比較する時、地に属するものなのである。ろうそくは暗黒と比較するなら光であるが、同じろうそくを太陽と比較するなら、みじめな薄暗い光にすぎない。

③聖書による啓示と権威

キリストは神そのものであられるから、キリストが語られることは、キリストが天において「見たこと、聞いたことを証しされる」わけで、神からの啓示である。ここにキリストが語られる言葉の権威がある。

キリストが地上生活を送っておられた時には、キリストからじかに神の言葉を聞くことができたが、キリストが昇天された後、神は私たち人間の救いについての御心を、聖書として啓示してくださった。

聖書が神からの啓示であると言えるのは、神の靈感によって書かれたからである。だから、今日、聖書に記され

ているところは、キリストが地上生活を送っておられた時に語られたと同じ権威を持っている神の言葉にほかならない。だから、私たちはこの聖書に聞き従わなければならない。

(2) 主のあかしを受け入れた少数の人々

《この方は見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。

その証しを受け入れた者は、神が真実であると認める印を押したのである》(32-33節)

しかし、奇妙なことに、「だれも」主の「証しを受け入れな」かった。この文章における「だれも」という表現は、次に続く節からも、明らかに限定された意味に理解されなければならない。

それは「ごくわずかのしか」という意味にちがいない。アンデレ、ペテロ、ピリポ、および他の人々はキリストの証しを受け入れた。

ヨハネは人類全体を眺め、救い主の教えは大多数の人々の拒絶するところとなった、と述べている。イエスは天から下って来られた方であったが、そのことばに耳を傾けようという人々は比較的少数だった。

33節は、主のことばを神のことばそのものとして確かに受け入れた少数の人々のことを述べている。「受け入れた」ということは、「神が真実である」と認めた、ということであった。

「認める印を押した」これは文字通り印を押すという意味ではない。これは「自分の信仰を正式に表明する、自分の確信を公に告白する」という意味である。

(3) 御霊を限りなく与えられ、神のことばを語られる

《神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである》(34節)

キリストは神から遣わされて来られた方であるから、権威をもって神の言葉を語られる。それは「神が御霊を限りなくお与えになるから」なのである。

「神が御霊を限りなくお与えになるから」と、新改訳では「限りなく」と訳しているが、英訳では「量ってではなく(not by measure)」となっている。これは「十分に、完全に、量ることが出来ないほど豊かに」ということ。

最も優れた使徒や預言者に対してでも、神は聖霊を「量って」与えられた。彼らの賜物と恵みは、共に不完全であった。しかし、神が遣わした方であるイエスは、全く異なる。イエスには聖霊が量り得ないほど、すなわち無限に豊かに、しかも完全に与えられている。イエスの人性の中には、御霊の賜物と恵みが、少しの不完全さもないほど豊かに与えられている。

《父は御子を愛しておられ、その手にすべてをお与えになった》(35節)

これは、神の権能が与えられたというだけでなく、私たち被造物である人間の運命もすべて御子イエス・キリストにかかっているということである。

(4) 主イエスを信じることの重要性

《御子を信じる者は永遠のいのちを持っているが、御子に聞き従わない者はいのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる》(36節)

ヨハネの証しは、主を信じることの如何に重要なことであるかを厳粛に述べる。彼の弟子たちがそれを受け入れようと、受け入れまいと、彼は弟子たちに、いのちか死か、天国か地獄か、いずれが与えられるかは、すべてこのイエスを信じるか否かにかかっていると、語った。

ここで、明快に、また明瞭に、「御子を信じる者」はみな「永遠のいのちを持っている」と述べている。神の御子に聞き従わない者は「いのちを見ることがなく、神の怒りが」すでにその人の上にとどまっている。

「信じる」とは、ただ単に頭で承認するといった知的な問題ではなく、「聞き従う」心の態度の問題である。しかも、1度だけの心の態度のことではなく、「信じている」とか、「聞き従っている」という、これからも続いていく生活方針の問題である。

いくら神の言葉を聞き、イエス・キリストの救いの福音を聞いても、それに従う意志がないだけでなく、これからも従っていかうと思わない心の態度、生活方針をとる人は、永遠の祝福にあずかることがないだけでなく、「神の怒りがそのうえにとどま」り続けるのである。これが最後の裁きというものである。しかもそれは今すでに始まっている。神の怒りが、神の救いの恵みを無視し続ける者の心の上にとどしりと重石のようにのしかかっている。これから逃れることのできる人はいない。

